速報　2010 年 7 月 11 日　皆既日食（速報）

～仏領ポリネシア・機上観測～

飯塚礼子（日食情報センター）

私の日食病は 1983 年 6 月 11 日のインドネシア日食から始まり、昨年 2009 年 7 月の日食は船上（ぱしふぃっくびーなす）にて観測しました。今まで「陸・海」で日食を体験しましたので、次は「空」での日食を体験したく PTS が主催する機上観測に参加しました。

今回の日食はジャンボジェット機 A320 をチャータしたものでした。時速 4,000km で移動する本影錐に時速 850km の機体をクロスする形で飛行します。飛行機の左側の小さな窓に皆既日食を導入すると言う飛行計画を立てました。フライトプランは国立天文台の相馬先生が行われました。

飛行機はエア･タヒチ･ヌイ航空のステファン機長をはじめ副操縦士はエアフォースワンを操縦していたベテランの方々の支えで地上より約 1 分弱長く日食を堪能することができました。

図 1　エア･タヒチ･ヌイ航空のクルー

朝、6 時 40 分飛行機はタヒチのパペーテ発。国際線手続きで出国し国内線で戻ってくると言う面白い形で始まりました。飛行機での部分食経過は地上と違い飛行している場所によって変わります。よっていきなり誰かの「太陽が欠けている！」から日食スタートです。

フライトプランは高度 12,500ｍで第 2 接触 5 分前から第 3 接触 5 分後まで左側の窓に太陽高度が 25 度になる地点を飛行します。よってそれまでの時間は、欠けた太陽が機内の右窓に来たり、木漏れ日によって三日月の太陽が機内を走るような場面に遭遇しました。

私はキャビンアテンダー席で機内アナウンスをしながら小さな窓で皆既を体験することができました。第二接触のダイヤモンドリングは今までに見たことも無いくらい眩しく綺麗な光で「第二接触です」の言葉を失い、あわててアナウンスしました。

図 2　皆既日食（ﾀﾋﾁ在住　足立善太氏撮影）

空気が薄いせいかコロナも非常に鮮明で地上では味わったことのない日食でした。アメリカのグループで飛行機観測する方々がいますが、飛行機に拘る理由が本当に解りました。第三接触 5 分後終了の機長アナウンスが流れた時は皆から大きな拍手が沸き起こりました。その後ジャンボジェット機が低空飛行し、南の島々を観光するという贅沢な日食でした。

飯塚礼子